

No. 1144

ついに時効

—三億円強奪事件—

『事件は白バイ警察官を装って極めて多額の現金を強奪するという、わが国の犯罪史上まれに見る重要で特異なものであり、警視庁としては事件発生以来、全力をあげて捜査してきた。しかしながらお犯人を検挙できなかったことに……』、時効が完成した12月10日、午前零時、土田警視總監は沈痛な面持で記者会見をした。昭和43年12月10日、日本信託銀行の現金輸送車が偽装白バイに乗り、警官を装った男に止められ2億9千4百万円というわが国犯罪史上最高の現金強奪事件が発生した。事件発生当初、警察側の初動捜査の失敗など、いくつかミスが重なった。124点という遺留品の多いことも捜査をあやまらせた。

12月21日、犯人のモンタージュ写真公開、44年4月9日、逃走用カローラ、小金井市本町団地で発見、そして12月12日K青年を別件逮捕、ガアリバイ成立、捜査に汚点を残した。

あまりにも鮮やかな手口による犯行に、国民の反応はまちまち、無責任な面白さいくつかの話題が生まれた。また捜査本部には約3万件の情報が寄せられた。昭和50年12月9日、事件発生の日と同じく雨の降りしきる中、最後の捜査が続けられた。この日は特に情報も多く、300件を越えた。しかし、決め手となる手がかりは何もなかった。うなだれる捜査員たちを前に中平刑事部長が労をねぎらった。

『7年間、本当に御苦勞様でした。諸君の中には、おそらく犯人の顔を見なかったくやしき、7年間の苦勞の数々やりきれぬものを感じているかも知れない。しかし我々はやるだけのことはやったのだ。肩を落さず捜査本部の門を出てほしい』

10日午前零時“現金輸送車強奪事件特別捜査本部”の看板がおろされた。真白だった張り紙はすっかり赤茶け、ところどころ破けていた。